

必要な時を考えている。何も考えていないのは特に間違いではないのだと自分に言い聞かせる。それは大切なものですか？ と。

いろいろなある中で公園に行つたことは特に困るようなことではない。ひっそりと咲く花が綺麗に見えた。

恐ろしく思い出の中とうり二つの光景に私はびっくりする。

感情は揺れて、その花をよく見ていると、困つた。

昔の自分を投影しているかのように、揺れている花は、私の感情も揺らしている。

風が吹く。それは何の前触れだったのか。

公園の中で一緒に遊んでいた男の子は私を見てにつこり笑う。

公園の中で光を灯していた電燈に陽炎が揺らめく。

男の子は笑つて、私を見続ける。まるで私の考えを見抜いているかのように。

いつの日か、私が変なことを考えていることがあり、それを男の子に話してしまったことが原因なのかもしれない。

風が吹く。いずれ終わるであろう過去への執着。

きつと明日になれば空が晴れると思う。そしてまた、その花は揺れるのだと思うと。

心が晴れやかになって、その花と一緒に隣で揺らさせてもらおうと思う。

それからでも遅くないと思うから。

私の心は、花と同じ。

私が見ている花は心と同じ。

必要なことを考えることは大切だ。

そしてそれを癒す花を見る行為もまた、必要なことだと、そう信じている。